

# 平成25年度「水環境文化賞」を受賞して

大館自然の会代表 伊藤郁夫

この度は水環境文化賞という身に余る大きな賞をいただき、会員はもとより活動を支える多くの市民とともに心より感謝申し上げます。

当会は「忠犬ハチ公のふるさと」秋田県大館市で、1988年4月、「地域における自然保護憲章を実現する」ことを目的に創設された市民団体である。活動は今年で27年目を迎え、正会員は102名いる。目標である「地域のきれいな空気と水、美しい景観、かけがえのない動植物などを守り次世代へ伝える」の達成のため、以下の主な活動を行っている。

## (1)テロロの森づくり活動

市内を流れる長木川流域（米代川水系）の国有林にブナを中心とした水源の森（テロロの森）づくり活動だ。「テロロ」とは水源地帯のブナ林に生息する「アカショウビン」の地方の呼び名で、テロロが棲み着く豊かな森を創造したいとの願いが込められている。天然秋田杉を産出した当地の長木川はかつて豊かな水量を誇っていた。鉱山の煙害などで荒廃した原流域の植生を再生し、清流を取り戻し、野生生物にもやさしい森づくりを始めた。保水機能の高い広葉樹の森は、地球温暖化対策や生物多様性の保全にも貢献できる活動だと確信している。米代東部森林管理署と協定を結び、1995年から地元の小学生、生徒、学生、市民の延べ三千数百名の参加により、これまで6,100本を植樹した。育樹活動や生育調査を進める一方、山菜教室、森の工作、自然観察など森とふれあう活動も重視している。樹海のグリーンベルトを拡げる森づくりの一翼を担いたい。

## (2)トンボ公園づくり活動

同じく1995年から取り組んだのがトンボ公園づくりだ。「市民の森」の一画に16面のトンボ池と細流のオニヤンマの沢を造成し、これまでにモートンイトトンボ、ホソミオツネイトンボなど絶滅危惧種も含め、42種のトンボが確認されるようになってきた。ヤゴやメダカ、アカハライモリやシマドジョウなど、水生生物もひしめきあって生息している。公園上空にはオオタカが舞い、水辺にはカワセミも姿を現す。夏の夜は飛び交うホタルに出会うことができる。

水田や湿地の消失や水質汚濁などで悪化する地域の水環境に危機感を持ち、自然環境の復元による生態系の再生を目指した実践活動である。トンボ公園は大館市から土地を借用し、整備、管理しており、日常的に多くの市民が訪れる場となっている。当会では夏休み親子トンボ教室や児童自然体験交流会（写真）などのフィールドとして活用し、県内外からの参加もある。波及効果として地域でも近年親水公園造成などビオトープづくりの取り組みが始まってきた。

## (3)環境学習副読本の発刊と普及（無償配付）

環境学習副読本の「長木川と生き物たち」（A4版20

頁）、「ふるさとのトンボは今」（A4版16頁）、「森吉山のクマゲラ」（A4版35頁）は小学生にも親しめるように写真をふんだんに使用しながらも、内容豊かに編集している。各種行事の参加者の他、行政や学校などの教育機関に備え付けられている。老人介護施設や保育園からも配付希望があった。再発行やダイジェスト版を作成してきたが、助成金等を活用して今後も普及を図っていききたい。

## (4)学習会などの啓発活動

ふるさと自然写真展と学習会は、「ふるさとの自然は今」がメインテーマで、だれでも出品や参加ができる。里山観察会、渡り鳥観察会、観察登山などにも力を注いでいる。里山観察は春から秋まで実施している。観察登山は八甲田山や早池峰山、森吉山など北東北の原生的な自然を観察するのが目的で、この企画だけは実費負担だがその他の行事は会員と非会員の区別なく参加費は無料である。

小中学校や諸団体からの学習支援や諸行事の協賛などの要請には可能な限り協力している。自然環境だけでなく、その保全のための活動も次世代へバトンタッチしたいと念じている。

## (5)川の生き物調べなど調査活動

川の生き物調べの他、広葉樹生育調査、植物群落調査、クマゲラ営巣調査などを当会独自で実施している。また、大館市からの委託事業の「市内に生息するカラス数の調査」は9年間継続している。県文化財指定の「鳥潟会館庭園」や小中学校の樹木調査も実施した。あわせて調査結果に基づく要望や提言も行っている。河川改修や街路樹の整備など多方面で、当会が意見を求められることも多い。今後も地域の課題には積極的に応えていきたい。

素人の集団で大河の一滴ほどの活動だが、今回の受賞を大きな糧として、地域の自然環境を守る活動、とりわけ水環境保全と創造のため一層努力したいと意を新たにしている。



写真 大館市児童クラブ自然体験交流会